令和４年度　第１回立科町総合教育会議録

日　時　令和４年１２月２１日（水曜日）午後３時～
場　所　立科町役場　会議室

参集委員

立科町長	両角　正芳
立科町教育長	塩澤　勝巳
教育長職務代理	飯島　正茂
教育委員	池田　広
教育委員	遠山　貴美枝
教育委員	久保井　智恵

事務局　齊藤総務課長　市川財政係長　羽場教育次長　山口たてしな保育園長
上原子育て支援係長　芝間社会教育人権政策係長　浦野こども教育課長補佐

協議事項

（１）立科教育について
〇学力向上事業
〇特別支援教育の推進
〇ふるさと教育

（２）その他

羽場教育次長　ただいまから令和４年度第１回立科町総合教育会議を始めさせていただきます。それでは始めに、両角町長から挨拶をお願い致します。

両角町長　それでは皆さん改めましてこんにちは。
今年も余すところ僅かとなり大変お忙しいなか、令和４年度第１回立科町総合教育会議にご出席頂きまして誠にありがとうございます。
日頃より町の制度、とりわけ教育行政にお力添えを賜り、感謝申し上げる次第でございます。
さて平成２７年４月１日に施行された「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正に伴いまして、立科町でも教育大綱が定められたところでございます。

この大綱は皆さんご存じのとおり町民の意向を教育行政により反映させるために町長と教育員会とで構成する総合教育会議で協議し策定することとなっているわけでございます。

法改正によりまして首長の権限が大幅に拡大されたということではございますけれども、これまでの教育委員会が抱えてきた役割等にかんがみながら教育委員会の主体性そして独立性を保証し、立科独自の取り組み、立科教育を継続的に推進するとともに地元高校を存続発展させ地域振興に繋げていく、また児童生徒に係る重要案件等については町長部局と教育委員会とが互いに連携し合いながら立科町の教育振興を図っていくことが求められているところでございます。

本日の会議においては「学力向上」「特別支援教育の推進」「ふるさと教育」この３点を中心にご協議をいただきたいと思っているところでございます。時節柄大変厳しい寒さが続く毎日ですが、お身体に十分ご自愛いただき希望に満ちた新年が迎えられますよう祈念申し上げ、本日の会議が実のあるものになりますことを期待申し上げて開催にあたりましてのご挨拶にかえさせていただきます。

本日は大変ご苦労様でございます。

羽場教育次長　両角町長ありがとうございました。

それでは協議事項に入りたいと思います。本日齊藤総務課長と市川財政係長にご出席を頂いております。

それでは、両角町長の進行でお願い致します。

両角町長　それでは早速、協議事項に移らせていただきます。

（1）立科教育についてということで３点「学力向上」「特別支援教育」「ふるさと教育」とございますが、これらについて説明をお願い致します。

塩澤教育長　それでは私の方から説明をさせていただきますのでよろしくお願い致します。

立科教育の推進ということで町長の方からの挨拶の中にもありましたように一貫した教育ということで進めているのですが、その中の共通するものをあげて説明をさせていただきたいと思います。

その一つが「学力向上」であります。学力向上とは何であげたかということですが、学力向上は小学校からの積み上げが中学・高校と繋がるということから事業を行うこととしました。

その中でも算数・数学これは基礎の上に全部積み上げていく教育になる

ということで一番の基礎基本ができないと上の段階に進めない、上のことが理解できないとなりますのでここをまずやろうということで始めました。

やり方としてどうしたらよいかということですが、先生方が算数・数学をどういう内容をどうやって教えていて、子どもたちはどう理解しているのかどこで躓いているのかわからないといけないということから、町の方で算数・数学の講師を小学校、中学校、高校にそれぞれ一人ずつ配置をしまして、小中、中高で講義、チームティーチングをしながら行うということで進めるということで行っています。

具体的には小学校の教員が中学校に、中学校の教員が小学校と高校に、高校の教員が中学校にということで、中学校は小学校も高校も行く、高校は中学に行く、小学校は中学に行くということで行っています。

具体的にどんな風に行っているかというと、小学校から中学校へは週 4 時間、中学校からは小学校に週 4 時間、高校に 2 時間、高校から中学校には週 3 時間というようなことでそれぞれ先生が出向いて一緒に授業という形式をとっています。これ以外の時間についてはそれぞれの自分の学校でチームティーチングを行って、小学校については少人数も行っているということです。

小学校中学校、中学校小学校、高校中学というそれぞれの配置の中でなぜこれをやっているかというと、小学校の講師が中学校に行ったときに中学校の生徒あそこのところで躓いているよね、だとしたら小学校でここをきちんとやっておかないといけないよねということがしっかりわかってくる。

それと同時に中学校の先生も高校の数学をみて、中学でここをちゃんとやっておかないと高校では伸びないよねということが理解でき、そういうことが分かりますとそれだけいい授業ができるということで行っています。

従ってそれぞれの学校ごとで算数数学の単元をやるときにここが大事だということが分かってきます。先生方は終わった後、そこで反省というか話のなかでここをやるならこういう教材はどうだろう、こう進めたらどうだろうというような打合せができるという風に動いています。

先ほど小中の学力テストの結果考察協議をいただいたのですが、今年度の中では、中学校の数学につきまして平均正答率は 58、全国平均は 52 ということで 6 ポイント以上良いという結果です。

小学校につきましては、平均正答率は 60 ですが、全国が 63.3 ということで 3 ポイントくらい違うということです。後ろのところの 4、5、6 ページに資料をつけさせていただいております。

5 ページの資料ですが令和 3 年度に行われた学テの結果です。立科町が

65 で、全国平均が 70.2 で 5 ポイントくらいの差があったのですが、令和 4 年度は 60 の 63.3 ということで今まで 5 あったポイントが 2.7 まで縮まったということで差が少なくなったという点では成果が出ていると思います。それから 6 ページ中学校は 57 で、全国平均も 57.2 でほぼ同じだったのですが、今年度につきましては立科中学校 58、全国平均 52 ということでかなりいい成績でした。こういった授業が功を奏しているのかと考えております。とはいっても、先ほどの定例会の中でも話題になりましたが年代によってもバラツキはあります。必ずしもこれで全部いいとはいかなくて、年代別で良かったり悪かったりはありますが、いずれにしても地道にやってきたことが成果に繋がったと思っています。

来年度は分かりませんが今の段階ではそのような感じです。今までも大体差は 3～5 以内というところだったと思いますが、本年は特に中学校の場合についてはとてもいい成績に繋がったと考えています。

これだけではなくて、このほかにも昨年度から指導主事を配置しております。指導主事には、先生方の資質向上、生徒のサポートというふたつの役割りを担っていただいていますが、特に先生方の資質向上に力を入れていただいている状況です。

子ども達のわかった・できたという気持ちが、次はどうなるのかという探求心に繋がっていくという学習をしてほしいとお伝えしてありますので、それに向かって指導主事に小学校中学校の先生方に算数・数学のみならずそれぞれの授業においてご指導をいただいて、2 年目になりだんだんと成果が出てきている、先生方の意識も変わってきているということであります。特に小学校はそれぞれの学級担任で全部持ちますので共通の話題が沢山ある、ところが中学校になると教科担任制になりますので数学は数学科、社会は社会科と国語は国語科いうようなセットでそこでの先生方の繋がりはあるが、全体的な繋がりはない。そういったところを指導主事に繋いで指導していただいて、皆で子どもたちを育てようというところに繋がってきたと感じております。これから更に子どもたちが意欲をもって取り組んでいけるような指導をしてくれる先生方に育っていってほしいと願っているところであります。

学力向上については、今のところ算数数学に特化してはいますが、それぞれがお互いに研究しあうということが他の教科へも繋がっていけばいいのかなと期待を持っているところであります。来年度も子どもたちの学びの向上に向けて取り組みをしてほしいなと思います。

そうは言ってもただ学テの数字が全てというわけではありません。あくまでも子どもたちの学力が定着してきているのかを図る物差しの一つだと

考えておりますので、何が何でも点数を上げろという気持ちではありません。子どもたちのやる気を引き出してくれるような期待をして取り組んでいる事業であります。

すでに委員さん方ご承知だと思いますが、概略説明させていただきましたので、ご意見ご質問とあれば承り、改善するところは改善しながら前へ進みたいと思っていますのでよろしくお願い致します。

両角町長　それでは（1）の中の「学力向上事業」の関係について只今教育長の方から説明がございました。これについては立科町独自の立科教育ということの中で小中高互いに連携し合ったチームティーチングを行いながら、相互理解を深めていくということの中で進めております。学力調査の結果等も踏まえて委員さんたちの方からご意見ご質問ございましたら、挙手の上、御発言いただきたいと思います。どなたからでも結構です。はい、どうぞ。

久保井委員　これは 2 年くらい前からですか。

塩澤教育長　学力向上は平成 25、6 年からやっています。

久保井委員　学力テストの結果で算数数学になったのですか。

塩澤教育長　実際にはそうです。学テなり学力検査をやった中で算数数学が弱く、算数数学は、小学校の九九から始まってそれが身についていないと方程式に行かれないよねということでやるなら算数数学ということでこの教科を選定しました。

久保井委員　素晴らしいなと思います。小中学校は義務教育ですが、同じ町内でも高校は県立ですが、県立の高校にも町費枠で講師の先生を置くことは可能なのですか。初歩的なことですみません。

塩澤教育長　事務的なことを言いますと、町で雇った講師ですのでこちらから派遣をするという形です。あくまでも向こうは県立ですので本来は使わないということですが、町の先生を派遣して研修させるので使ってくださいということで県の高校教育課と協定を結んでいます。

久保井委員　単発的でなくずっと継続して、まさに算数の小中高一貫のような形で、

算数数学はいろんな意味で積み重ねの最たる教科ですのですごいなと思うのですが、先ほどの話で応用力もあるけど基本的なところもあるよということがすごく大事だと思います。それが出来ないとずっと培っていたものが、数字が全てではないとはいえ、指導主事の先生にも子どもたちの生き生きした場面を見せていただいて達成してきている部分があるのかなと思って、町内に居ながら存じあげなかったのですが、立科町の具体的な素晴らしい部分を見せていただきました。

塩澤教育長　正直なところ私も中学の数字を見た時に内心は成果出たなとか、口に出しては言えませんがやってきてよかったなと。そうは言っても年代によって差はあります。その年の生徒によって違いはありますが、小学校も差は少なくなっています。地道にやってきたことの積み重ねでこれからも支援をしっかりできればと思います。

久保井委員　指導主事の先生が 2 年目ということで、学力向上も 2 年目にしては早すぎるなと思ってしまったので、実はずっと前から続いているとわかりました。

両角町長　よろしいでしょうか。他にはどうでしょうか。

遠山委員　算数の先生が小学校中学校に中学校から小学校にと行っているということですが他の教科は、英語とかはどうなのでしょうか。中学 1 年生の英語が難しくなっているので躓いてしまう子が多いのではと感じるので、そこも先生が行き来してくれてどこが分からないのかなとかそういうことはできないのですか。

塩澤教育長　出来れば主要な教科でできるといいのですが、人とお金の問題があり 1 教科だけです。小学校の場合は、毎日英語があるわけでないので先生の使い方が難しい。そこを補うために民間の業者から先生を派遣してもらって、その方を入れてというやり方をしています。小学校にも英語のできる若手の先生おりますのでその方に協力してもらっています。この頃オレゴンから新たな ALT が中学校にみえたのですが、まだ馴れないのですが馴れてくるとダラ先生のように中学校空いている時間に小学校に行くというようなことで応援をしてもらいたいと思っています。できるだけ子どもたちが英語にも親しみを持って、これからは英語ができないと通じなくなってしまう場面もありますので出来るだけのことはしていければと思っています。

両角町長　今の話のように町内に小中高１校ずつしかないので、逆にみるといいところもあります。人数が少ないなりの逆にいいところを立科町は特色ある立科教育という形をとるということです。他にはございますか。

飯島職務代理　中学の教員が小学校に行って難しい立場だと思うのですが、その講師の方が中心で授業を行うのですか、中学校から行く人は正規の職員ですか。決まっているのですか。

塩澤教育長　その時の先生方の人事配置で違います。今までは県費の正規の先生が行ってくれたこともあるし、町で雇った講師のことも両方あります。今年度は町の講師が行っています。先生の配置によって上手く授業が回らない、担任も持っているということで講師になっています。出来るだけ大勢の先生に行ってもらえるとありがたいなと思っています。

両角町長　他はよろしいでしょうか。

いずれにしても立科町の蓼科高校の中にもポプラアカデミーという学習塾を持っています。町独自の取り組みで本来県立高校に置くということは考えにくいことですけれども、それは逆に高校生の学び直し、中学生の蓼科高校へ行くということだけでなくどこの高校に行くとしても、そこで学力向上を図っていく手段としてありますので､1 教科 500 円ということでやっていますので、これも大きな側面からみると子どもたちの学力向上に繋がっているし、蓼科高校のひとつの位置づけとして地域高校の位置づけとして他にはない例だと思います。なぜ県立高校に町が力を貸すのかという話もありますが、そうではなくて蓼科高校は地域の皆さんが創り上げた高校ですので、これを支援するということと、併せて中学生の皆さんの学力向上にも繋げていくということの双方を担っているということでご理解をいただきたいと思います。

飯島職務代理　違う地区で、高校生が中学校に来て新 1 年生を 1 か月くらい生徒が生徒に教えるというようなことがあったのですが、蓼科高校の生徒が立科中学校に行って１時間くらい学び合うような機会を持つことはできないのでしょうか。私が知っているところでは水曜日に生徒が中学に行って１時間から 90 分くらい希望する生徒と学び合うような、そんなことが実施出来たらいいと思いますが。

塩澤教育長　先ほども指導主事の話の中にありましたが、子ども同士の教え合いの方が興味を持って進んでいけるかもしれませんが、それには高校生の力も借りな

ければならないので貴重なご意見いただきましたが、そこはまたということでお願いします。

両角町長　貴重なご意見ありがとうございます。他にはよろしいでしょうか。

もしなければ、これで 1 番の「学力向上について」を終わりにさせていただいて、2 番の「特別支援教育について」に移らせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは教育長の方からお願いします。

塩澤教育長　それでは、レジメの 2 ページをご覧ください。

「特別教育の推進」ということであります。主な内容は支援員の配置ということになります。小学校中学校共に支援学級に在籍する生徒がかなりの数います。その中で障害も違ったり、それぞれメニューも違う児童生徒がおるわけですが、その子たちに適切な学習環境を提供して指導育成できるということで、町費で小学校に 5 人、中学校に 1 人、1 人は授業も共有させていただいますが、支援員を配置して支援学級に在籍する子どもたち一人一人に寄り添った教育の実施ということを目指しています。

支援員の方には校内の通級指導も担ってもらっています。どのような状況かと申しますと 7 ページ以降載せさせていただきました。

小学校はこの 3 年間の支援学級在籍の児童数です。学級としては知的障害と自情障という 2 つの分類があるのですけれども、今年度小学校につきましては、知的に 5 人、自情障に 21 人、合計 26 人の在籍であります。在籍の比率で行きますと 9.92%であります。

中学校は、知的 5 人、自情障 6 人、合計 11 人で在籍比率は 7.43%です。参考までに県の集計されたものですが知的、自情障合わせた生徒数合計で 9786 名、在籍比率 7.06%ということです。

うちの方高いのではないかと感じると思うのですが、11 月 25 日発行の県民新聞で、平成 20 年から令和 4 年までの在籍数の比率が出ておりまして、20 年は小中併せて 1.62%、令和 4 年では 6.46%と高い比率になっております。尚且つ通常学級に在籍している生徒の中でほぼ 3%程度が支援を必要としているという報道であります。その状況を鑑みてみるとうちのほうはかなり丁寧に子ども達をみてくれていると思っています。

それはなぜかというと保育園から小学校、小学校から中学校と繋がっていくわけですけれども、保育園から小学校へ繋がってくる、そのところをしっかりとどういう関係でどんな支援がいいのか見定めていくため就学支援委員さんがおりまして、その方に子どもたち一人一人しっかりみていた

だいて、その中で気になる子がいたら検査、相談に繋げていくよう対応していますので、在籍率高いと見えるかもしれませんが現実的にはちょうどあっているのかと感じています。

次 8 ページには小学校中学校の学年別の様子を載せています。来年度の予定ですが、小学校はまだ数が確定しませんが、中学校につきましては、来年度今まで知障と自情障がそれぞれ 1 学級だったのですが、知障が 1、自情障が 2 クラスで 1 クラス増えるという予想です。これは、今年度の 6 年生の中に支援学級在籍する児童が多かったということが理由です。

参考までに下に特別支援学校いわゆる養護学校に在籍する児童生徒数を入れておきました。小諸養護あるいは上田養護、花田というような学校に在籍している児童生徒数です。町内の支援学級以外にも支援学校に在籍しているお子さんがいることもご承知おきいただければと思います。

それぞれの障害別の状況はどんな状況かと申しますと、一番多いのは自閉症スペクトラムいわゆる ASD、二番目が複数の発達障害、三番目が注意欠陥多動性障害いわゆる ADHD、四番目が学習障害でいわゆる LD というような障害で支援学級を利用しているという状況です。

支援員さん多いと思われるかもしれませんが、正直言って他町より多いです。多いのは子どもたち一人一人をしっかりみていくということで町の理解をいただき支援員さんを配置しています。

それがないと低学年、特に 1 年生ではなかなか授業が成立しない。1 年生の早いうちにしっかり基礎を作ってあげないと難しいと思っています。

そこを町の理解いただけているのでそこでしっかりみていくということで対応しています。子どもたちは、支援学級にずっといるということでなく、通常学級で出来る授業はそこに戻って、できるだけ子どもたち同士の繋がりを増やしたい、人間関係を育ててほしいと願いながら、通常学級で上手くいかなければ戻ってこられるような対応をとっています。通常学級に行くときは支援員さんについて行ってもらって、理解が出来るように手助けしてもらえるような配慮をしています。引き続き来年以降も子どもたちしっかりみていきたいと考えていますので、必要な経費について確保をお願いしたいと思っています。

両角町長　只今「特別支援教育の推進」のなかで支援員の配置について説明がありましたが、皆様のほうからご意見質問等ございますでしょうか。

池田委長　教育長、これは何年か前からやっている事業だと思うのですが、どれくらいたつのでしょうか。

塩澤教育長　16 年位前からですかね。16 年前はこの人数はいませんでしたが、町で支援員さんをお願いし始めたのがそこからです。

池田委員　もう一ついいですか。特別支援教育という観点からは外れてしまいますが、特別支援教育については、私もすごく力を入れて立科町として頑張ってくれていると感じています。

それとは少し違いますが、今、不登校のお子さんがすごく多くて個人的に残念だと思っているのですが、例えば 8 ページで中学校の 1～3 年で知障自情障の 11 名ですが、不登校の人数を見ても 2 年生が 5 名、3 年生が 5 名ということで幸いにも 1 年生はいないということですが、知障自情障の子で不登校になっているという共有の方も一部いるかもしれませんが、基本的にはそうでない子が残念ながら不登校になってしまう、この 5 人ずつというところでみるとほぼほぼ知障自障と同じ数がいると考えられます。

パーセンテージで見た時にクラスの人数、学年の人数と比較してどうなんでしょうか、場合によっては 1 割くらいになってしまうでしょうか。中学校の先生のほうでもこの部分が何とか町のほうでも支援していただけないのかなという意見も伺っておりますし、実際問題他から比べた時に立科町としても不登校の人数の割合は高いのかなという気もしております。

今後もちろん財政が関わってくるところだとは思いますが、不登校支援も力を入れて不登校がなくなるような方向にもっていくことが望ましいのかなと思います。

一番の問題点はどうしても不登校のお子さんは心を開きづらく、担任の先生だといいけれども他の先生だとうまくいかないというところに問題があるようです。ですので、そういったところに公費で一人専任の講師のような方が配置できれば改善に繋がっていくのではないかと個人的には思いますので、是非そんな部分もご検討いただければいいと思います。

塩澤教育長　貴重なご意見いただきました。小学校から中学校にあがると中 1 ギャップが大きい。それを境にして不登校になってしまうお子さんがおられます。支援級だからということではなく、成績アップが一番大事かなと思っています。もうひとつは、中学校は教科担任制になりますので支援級であっても教科ごとに先生が入れ替わってしまうので、担任以外の先生に馴染めないというようなことも生じてくる、二つありますよね。その点を十分考慮して支援していきます。来年度はまた支援級入級のお子さんの中学校入学が多いのでその辺も町で理解を頂ければとありがたいです。先生方に子どもたちのサポート

をしてもらうのが第一だと思っています。それでも尚且つ難しいという状況であれば町でも協力して少しでも子どもさんがいい環境で教育が受けられるよう支援が出来ればと思っています。

両角町長　よろしいですか。

池田委員　はい。

両角町長　皆さんいろんな方がいらっしゃいますので、特に中学生に対して支援員の数が足りないということですが、中学は専科になりますのでなかなか担任というわけにいかず難しいところですね。

他にはよろしいですか。1 番 2 番の関係で何かありましたら後ほどでもお願いします。

それでは 3 番の「ふるさと教育」について説明お願いします。

塩澤教育長　はい。「ふるさと教育」につきましては町のことを知って、町に愛着を持ってもらってやがて町を背負っていってほしいという思いの中で行っている事業です。これはどちらかというと出来るだけ学校主体になってもらって町の皆さん、人や物を活用しながら教育を進めていきたいとやっている事業です。

これまで小学校を主にしてやっておりますが、それぞれの学年に応じた現地体験学習で、リンゴ農家の 1 年間の作業を知ってもらいお手伝いをしながら学ぶ、5 年生はお米を作り収穫をしてみんなで味わう、その他町の歴史文化遺産というような松並木や塩沢堰や御柱や本陣などを見ながら歴史を学び町の良さを知ってもらうなど、特に松並木につきましては昨年度から小中高の皆さんに補植や清掃をしてもらい、自分たちの植えた木がやがて大きくなっていくのを楽しみながら誇りに思ってもらい、育っていってもらいたいと思っています。

町でお願いしている社会教育委員さんを中心に、それぞれの知識や技能や特技も持った方をお願いしましてサポートさせていただいています。これはコニュニティースクールにも繋がってくる事業なのでそんなところも大事にしながら行っています。

立科いいところだな、最後はここで暮らしたいなと思ってもらえるとありがたいなという思いを持ちながら支援をさせてもらっているという状況です。

両角町長　今、「ふるさと教育」の関係で話がありましたが、昔は子どもたちが自然に農業を手伝ったり、地域を駆け回っているうちに文化や遺跡含めて自然に自

分の中に溶け込んで入ってきたのですが、核家族化が進んで、家庭内では体験できない場合も増えていますし、いずれ地域の歴史や文化を知る必要があるので肌で感じてもらったり、成長する過程の中で知ること、その時にしか体験できないこともありますので重要なことだと思うのですが、今の問題について皆さんのほうから何かありましたらどうでしょうか。

私は、立科町にいる子どもたちというのは市街地のお子さんとはだいぶ違うとは思います。それでも従来体験していることが減ってきている気がします。絵本とか学習ができるというのとは違う、地元に身を置いて体験したり、覚えるということも重要だと思います。課外授業ということばかりでなくても生活、成長していく過程の中で地域を知るということは大事なことだと考えますがいかがでしょうか。

今の子どもさんはカリキュラムが大変な時で、逆に言えば今コロナですので外に出ての活動にはいいのかなと思います。

よろしいでしょうかね。よろしければ、また全体の中で出していただければと思います。それでは（1）の関係については以上とさせていただいて（2）のその他に移らせていただきます。

塩澤教育長　それでは事務局ほうから 9 ページお願いします。

3 年度の中学校卒業生の進学状況です。こちら学校名まで出ていますので取り扱いは慎重にお願いしたいと思いますが、どこの高校に、どのように前期なのか後期なのかどのような状況で進学していったのかの資料を提供させていただきました。

おかげさまで卒業生全員がそれぞれ進学できました。通信制も最近充実してきておりまして、そこに行くというお子さんもおります。とはいっても県の平均から見ると少なく、ほとんどが全日制に行くということではありますが、今年度も子どもたちそれぞれが自分の目標とする学校に進学できると嬉しいなと思っています。参考までにお知らせしました。

それからもう一つ蓼科高校ですが、私ども町長の話にありましたように学習塾ポプラアカデミーで高校生・中学生の指導をお願いしております。

平成 27 年度に出来ました。出来るだけ大学進学できればと支援をしてきたのですが、今年度蓼科高校から法政大学に 1 名すでに合格しました。

少しずつ成果が出てきたのかなと思っています。合格だけがアカデミーではないので、就職する人の試験もありますのでそれぞれが力をつけてくれればとの思いでやってきましたが、段々と定着をして成果も見え始めてきたというところです。

今後この成果を下級生がみて僕も私もと奮い立ってくれるお子さんが出る

とありがたいなと思っています。いい意味での成果が見えてきましたので今後もできるだけ支援していきたいと考えています。学校にも本人がその気にならないとダメですが、進学を希望しているお子さんには進路について前向きに考えていけるように支援していくと伝えており、それが学校全体のレベルアップにも繋がると考えておりますので、ご紹介方々報告させていただきました。

両角町長　今お聞きのとおりで、高校の進路状況をみていただくと分かるように、地元蓼科高校への進学は少ないですが、地域の良さをを知って蓼科高校に行ってもらうのも必要だと思います。逆にポプラアカデミーで学習されてより自身の学力を上げて目指す学校へ行くのも一つです。そして最終的には地元立科に戻りしっかりと町を支えていくとなってくれればいいわけですが、どちらかというと上小方面に進学が増えていると見受けられるようになってきたということです。

いずれにしましても子どもさんの数が少ない中でそれぞれの皆さんが目指す方向性があるかと思いますが、しかし原点は地域に根ざした子どもたちの成長ですので教育委員の皆様方にもその一端を担っていただければと思っております。

これで「ふるさと教育」の関係、進路の話まで話があったわけですが全体を通して（1）(2)併せて何かありますでしょうか。

久保井委員　先ほどの教育委員会からの話の最後で、令和 5 年度の中 1 が 1 クラスになるという話でしたが、その場合先生の配置はどうなるのでしょうか。クラスの数で先生の数が決まるというような話でしたが、それで先生が減ってしまうのでしょうか。大丈夫なのか気になったのですが。

塩澤教育長　小学校も中学校もそれぞれ学級数によって先生の人数が変わります。中学校は来年今の予想だと 1 学年は 1 学級になるので、1 学級減るので先生の数が減りますが、来年度は逆に支援学級 1 学級増える予定ですので、先生の数は相対的には変わらないということになります。そういった点では今と同じ先生の体制になりますので、全体の数は変わりません。

遠山委員　支援学級は正規の先生ですか。

塩澤教育長　多分 1 人は、不安定学級ということで講師対応になると思います。支援学級は県費の講師対応、1 学年は正規教諭ということで想定しています。

久保井委員　　中１ギャップということで加配の先生はつかないのですか。

塩澤教育長　　これが気をつけないといけないのですが、これからの交渉次第です。出来るだけ県の加配をもらえるようにお願いしているところです。

色々な事業メニューがありますので、来年度は「学びの改革パイオニア」ということで要望し、そこで加配 1.0 をお願いしているところです。出来るだけそちらでみてもらえるとありがたいなと考えています。

正直な話、小中学校の先生が足りなくて県も苦戦しています。どんな状況になるかはわかりませんが、再任用の先生方もいらっしゃいますので、そのような先生がいただければありがたいと思っています。いずれにして全体の数が足りないと回ってこないのでそのへんですね。

久保井委員　　保護者目線でいうと、今年小学校は 2 クラスにして、中学校は 1 クラスということでしょうか。

塩澤教育長　　現時点ではということですが、小学校は 1 人の差だったんです。35 人だと承知はされていると思います。小学校と中学校はまた違いまして、中学校は出来るだけ子どもたちに協調して成長してもらうということも考えておりまして学力だけでなく、あまり少人数にするとそこが難しいので、今のところ 33 という数字で、そんなに多くはないという感覚はもっています。正直なところまだ保護者からの話もありませんし、こちらとしては年明けに学校のほうで保護者説明会をしてそこで伝えていきますが、教育委員会としては 1 学級編成でと考えております。その分それに代わるもので支援を考えています。

池田委員　　来年も少ないのでしたっけ。今の 5 年生は。

塩澤教育長　　なかなか難しいのですが、来年は少ないです。そのあとは増えます。

池田委員　　小学校はいいと思うのですが、中学校は。

塩澤教育長　　中学校が、来年度までは今年と同じぐらいなので同じ状況になる可能性はあるということです。今年は特殊で支援学級に行くお子さんが多いという状況があってこの様な状態なんですが、通常で町外の学校に行くお子さんが例年通りと想定するとその心配はないと想定しています。

両角町長　　他にはどうでしょうか。

今回立科教育の推進ということで、総合教育会議を開かせていただいているわけですが、立科町の皆さんの話を聞いたり、小さな町ですが、独特な加配教員を入れたり、それぞれの先生方の交流があったりする中でバラエティーに富んだ教育が出来ていると思っています。

人員が減ってきてしまっていますが、逆にみるとそれだけ一人一人に手厚い教育に対する支援が出来るということで、これからの教育現場は先生方も大変だと思いますが、特に今コロナということもありまして、そこから新たに 3 番目の「ふるさと教育」のようなことを取り入れながらやっていただくと、違う意味で立科町の良さが出てくると思っています。

どちらにしても全体的に教員の数が少ないなかで、なかなか思うようにいかない部分があり、教育長はじめ教育委員会の皆様方には親身になって対応していただいていますが、教員の数が減っていて、教員も病んでいるという大変な時代です。

この立科町総合教育というなかで、町長が会合の中に口をはさんで出てきておりますが、教育というのはやはり教育委員会独立というのが一つの重要なことだと思っています。

確かに町長部局側の財政的なものも絡んできますのでそこは対応しないといけないと思いますが、教育は独立で、連携を深めるのはいいことですが、そこの分野に一般行政があまり入り込みすぎるのはのは良くないと考えています。そんなことでご理解を賜って今日の第 1 回目の立科町総合教育会議を閉じたいと思います。

池田委員　　もう一つ、この間の議会での一般質問にも出ていて耳にタコができているかと思うのですが、生徒が減ってきている、先生の数も限りがあるということを加味した上で学校の老朽化もありますし、先送りにするのではなくなるべく早めに小中一貫なのかどうなのかというところをみんなで議論しながら実現に向けてなるべく早くやっていければと思います。

両角町長　　そうですね。別に先送りをするとか考えているわけではありませんが、教育の現場をどうするかというのは非常にシビアな問題です。また町民の皆さんそれぞれの思いもあります。一つには人員が減ってきたからこういう形がいいんじゃないかと決めつけるのもいかがかと思いますし、かといって数が減れば減っただけ今後どうなんだと、両面が絡んできているわけです。そういった意味でどちらがどうかというのでなく両面でしっかり研究していくというのは大事だと私は思っています。

もう一つは、人員が減ってきたとしても、そこにはどういう教育のありようがあるのか、そこの原点をまずつかんでそこを議論してから、その先に池田さんがおっしゃったような小中一貫校問題も出てきます。それについては最終的な到達点になりますのでそこに行くまでの前段の部分をどうするのか。小学校に上がるお子さんの数が少ない 1 クラスになっちゃうのではないか、でも私どもは教育委員会とも話をして、人数が少なくても 2 クラス。特に小学校の場合は同じクラスでずっといくというのは刺激がないとか、いじめられる子はずっといじめられるというお子さんが出てきちゃうので、出来るだけそこの編成をして 2 クラスが必要かなということで特別な体制をとりました。今後そういった形で数が少なくても 2 クラスにできる形を模索しなければいけないと思っています。小中一貫校問題というのは先に送るというのではなくて、自分たちの教育の体制をどうしていくのかの原点をしっかり見つめなおして、数が減ってくるとそういう形の作戦に変更したがる事案がありますので、そこは慎重にせざるを得ないと思います。

また教員の数をしっかり確保していくということも、どういう形が一番重要なのかということもありますので、これについては議会中心に議論、教育委員にご示唆いただく中で進めていかなければいけないと思いますが、私は焦る必要はない。ただ検討しなければならない時期に来ていることは事実だと思います。どのような流れでやっていくのかを模索して、町民の皆さんの声を聴きながらこの辺でしっかり考えていかないといけないと思っています。私は決して逃げているわけではありません。これはあくまでも今すぐこういう結論ということでなくて今の立科町の現状、どういう状況になるのが一番いいのか焦らないで冷却をしてください。いかがでしょうか。

よろしいですか。

それでは 3 番の協議事項につきましては以上とさせていただいて事務局にお返しします。

羽場次長　　両角町長進行ありがとうございました。

また齊藤総務課長、市川財政係長同席いただきありがとうございました。

教育委員の皆様にはこの前に開催しました定例教育委員会含めまして、長時間に渡って大変貴重なご意見等いただきまして誠にありがとうございました。

以上をもちまして令和 4 年度第 1 回立科町総合教育会議を閉じさせていただきます。お疲れ様でした。